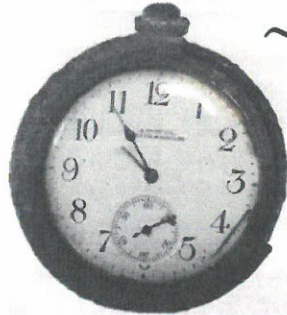
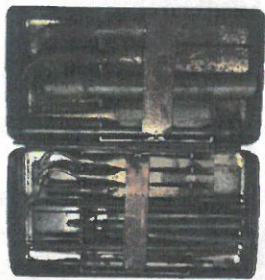


遺品が語る沖縄戦

～隠された多様性を探して～



※写真は昨年の展示内容です



国吉勇応援会公式FBもご確認ください！

日にち 6月30日(土)

時間 13:00～18:00

※13:00, 16:00 にワークショップ開催

場所 新長田勤労市民センター別館ピフレホール・クラブ室

(JR・地下鉄新長田駅南側すぐ ※住所 神戸市長田区若松町4-2-15ピフレ新長田3階)

入場無料

【主催】沖縄戦遺骨収容国吉勇応援会・特定非営利活動法人神戸定住外国人支援センター(KFC)

＜連絡先 特定非営利活動法人神戸定住外国人支援センター 078-612-2402＞

遺品が語る沖縄戦～隠された多様性を探して～

(2018年6月30日 @新長田勤労市民センター)

主催者ご挨拶

沖縄戦遺骨収容国吉勇応援会・学生共同代表 西尾慧吾

沖縄戦の惨禍を端的に言い表すと「二重の抑圧」になるだろう。激烈凄惨な地上戦に巻き込まれた沖縄の民間人は、米軍による攻撃に曝されたのに加え、本来は民間人を保護すべき日本兵による、壕追い出しや強制集団死などの迫害を受けた。沖縄を本土決戦阻止のための捨石として切り捨てたことに代表される、沖縄に対する内地の傲慢の背景には、内地主流の文化とは異なる沖縄社会への蔑視があったのではないだろうか。マイノリティへの侮蔑と同化圧力は、方言札の使用など、沖縄文化の過剰な駆逐に発展し、沖縄は物理的にも精神的にも蹂躪された。沖縄戦の悲劇は、内地と沖縄との間に存在する構造的差別の溢出なのである。

多様性を尊重せず、むしろマイノリティへの抑圧を強めるという日本社会の傾向は、沖縄戦後も改善されたわけではない。在日の方々への残存する差別や、移民労働者の冷遇は、多様性に対する日本のマジョリティの感受性の低さを象徴している。国際化の波が押し寄せる中で、日本社会の本質的暴力性が打破されない理由の一つには、沖縄戦のように、これまで日本の内的差別が生み出してきた惨劇を社会全体として認識し反省することがなかったことがあるのではないだろうか。

長田は現代日本の持つ多様性の顕著な表出点である。その長田で沖縄戦の歴史を振り返ることは、日本のマジョリティが戦前・戦後関わらず一貫して孕み続けてきた残忍さを顧み、払拭する契機になるのではないかと私は期待している。今回の展示には意図的に民間人関連の遺品を多く盛り込んだ。沖縄の壕がそもそも住民のための「第二の家」であったということ、そして住民をそんな生活の場から追い立てたのは沖縄に来た日本軍であったということ胸に噛み締めながら、自己批判的に遺品を見ていただければ幸いである。最後に神戸定住外国人支援センターの方々を始め、今回の展示にご理解・ご協力頂いた全ての方に感謝し、この挨拶の結びとする。

遺品展開催にあたって

特定非営利活動法人神戸定住外国人支援センター理事長 金宣吉

第2次世界大戦が終結して73年、その後の冷戦下で起きた朝鮮戦争が起きてから68年目の今年、北朝鮮の核開発・長距離弾道ミサイル開発を引き金に朝鮮半島での戦争が危惧される状況が生まれた。

しかし平昌オリンピックを契機に南北対話が実現し、米朝対話の道が開かれ、朝鮮戦争の終結宣言、北朝鮮の核放棄という平和へのあかりが灯ろうとしている。朝鮮半島での平和が、実現するまでにはまだまだ茨の道が続くだろうが、寛容や忍耐、時には妥協や打算を伴った合意形成であっても平和の道が開かれ前に進むことを願ってやまない。

一方、日本においては、朝鮮半島危機もテコに改憲をめざす力が強まり、平和条項の変更が俎上にあがっている。だが私たちは、前提として戦争の悲惨さを本当に認識できているのであろうか。また現実の戦争時に災禍の渦となる米軍基地を押し付けられている沖縄の矛盾に思いを寄せられているのだろうか。

1945年3月23日の沖縄諸島に対する激しい空襲、艦砲射撃からはじまった沖縄戦、米軍が沖縄攻略作戦の終了を宣言した7月2日までの3か月余の戦闘で日本軍将兵(県出身者を除く)6万5908人、米軍将兵1万2281人、県出身軍人・軍属2万8228人の戦死者が出た。また、一般県民9万4000人(推定)が犠牲となった。

沖縄戦では、戦闘だけでなく足手まといになるからと集団自決を迫られ亡くなった人もおり、スパイの濡れ衣を着せられ家族全員が殺された朝鮮人犠牲者もいる。

今一度、戦争を記憶の彼方へ追いやるのではなく、今を生きる私たちが平和の尊さを心に刻むため、沖縄戦で残された遺品を見る機会を戦争によって故郷を離れた在日コリアン、奄美出身者、ベトナム難民の多く暮らす神戸市長田区でつくり、多くの人と平和の価値を共有したい。

国吉勇氏について

1939年(昭和14年)2月25日生まれ。戦後60年間、独力で沖縄戦遺骨・遺品の収容に尽力し、約6000人分の遺骨と数十万点もの遺品を収容した。2016年3月31日をもって老齢のため活動を引退、同年11月には社会貢献分野の功労者として沖縄県から表彰を受ける。現在は十数万点の遺品が置かれた私設の戦争資料館にて遺品の解説にいそしむ。